



日用心法鈔三編

下

9
1303
9



口七九
1.303
9

日用心法 三編下 目録

- 一金持うねもちを無性むじやうふくらくひの人ひとなり。同遠どうえんひの事こと 二丁
- 一金持と貪くわん人にんとくらふとバ金持かねもちが勝かちまるといふ事こと
- 一智者ちやくしやう学生がくせいでも。身みを治おさめず家いへを齊ととのむと志こころしてハ役やく小せう五ご夜や更せい
- 一金かね浪なみのなしい者ものハ金かねすきこみふとといふ事こと 十丁
- 一金持かねもちの無性むじやうふ志こころしきハ有あ賊ぞく餓が鬼おにといふ事こと
- 一切いっけつのあひの我われ身み勝かちも貪くわん欲よくより起おこる事こと 十四丁
- 一我われ身み勝かちも利り欲よくすること。仕し方かたうらりといふ事こと
- 一あまたのあい物ものをあつついのうまい物ものハ跡あとでらといふ事こと 廿二丁
- 一豆まめ茶いりをあつつませて見みること金かねをあかせること人ひとの事こと 廿三丁

日用心法 三編下

- 一 聖をかりる人ふ色くありかせる人ふを得ゆる夏 九四丁
- 一 ある浪人身上の法立をよく志す安ん小暮せ呼 九六丁
- 一 世の中の風俗ふうする事ふるといふ事 三十一丁
- 一 一世の苦むかりふ志て樂むいといふ事 三十二丁
- 一 餅ついく七五三を例すゆ遊ふ事 三十三丁

家業出精の徳

因ふ念佛のありがたき事を知る人 三十三丁



日用心法鈔三編

下 三十三丁

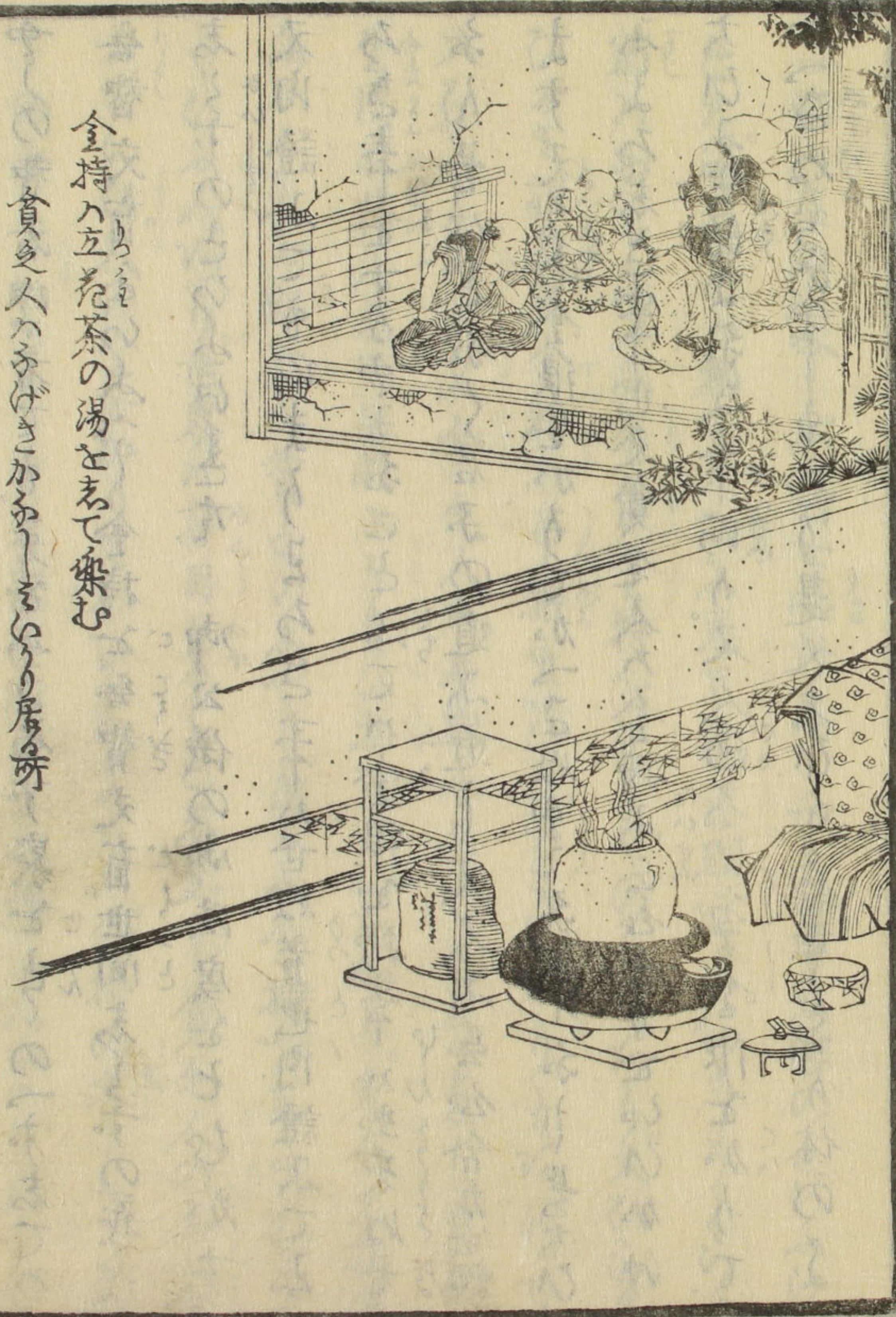
一 休の歌とて。全持とあううううういひたる故あり。是もを得ゆるゆき事也。全持むかり。あうううううういふけまは。中く左候の儀ふあうず。全持と貪人とくうぶまを。全持の方かいくうういふ志まがとくばかう。志やくと見て考ふべし。先全持とさうくいふ故ふ。

○ 全持と朝晩すける灰吹いたまるやど猶きことふいと志ま欲ふかき。人のむとふる雪へつもるふつけて。道とさする。

○ 全と持人の他法をよくきけバ。只いさふがう無慈悲かき道何の世の世間あうずの。義理あうず。ふさけあうずが全持ふあう。

○金持と十人よせてよく見えば中五五人ハ無学文盲
 かやうふ秋いららも何れで。家ふかきそがごとし。金持
 と無学文盲情けあらずとらふけきた。又金持ぬ貧
 乏人ハ猶更無学文盲情けあらずの。無慈悲かき道
 不義理の人多し。先身一慈悲ふさけがあつても。ふ
 い袖ハあつたす。飢饉等ふつき救米すらい金が生じた
 ても出する事ハふりがごとし。有福の人ハむせぬ慈悲
 ふさけとする。一言を以て金持と貧乏人との高下を志
 する。金持ハ十人ハ七八人ハ。禮義もそふらり。学文も
 道理も公得たる人多し。又人柄もよし。立花もあつさく。

茶の湯等も公得たる人多し。貧乏人ハ家賃のい物
 等ふかたを志して。学文も禮義も。立花も茶の湯も。出来
 がごとし。致したくても肝心の金根がふきぬ出来ぬ也
 是等の道理を以て。金持と貧乏人との高下を志すべし。
 又金持ハ無学文盲ても何れけきた。身を脩め家を齊
 つるふ於てハ大智者ふるべし。何所そふよの所がふくて
 ハ金根の持とぬ者也。所詮身をよくかこめ家業をせ精し。儉
 約質素を志し。孫ハ金持ハふりがごとし。ふらハ自然と
 君子の道ふけふ。身をよくかこめ家を齊するハ世界第一
 の入用ふりけ上とこす。智者ふるべし。け上をこす。養子。何



全持入立茶の湯を煮て楽しむ
貧乏人のあけさかあーまわり居所

中の智者學者ても。身をふさめず家をとくのしずめてハ。
 吾智文盲とりふべし金持を吾智文盲世間志らすの義理
 志らすのとりふべき也。 卿公儀の卿法度をとむかす。
 又内證ふても阿まよりとろき事ハせぬ者也。内證ふてと
 ろき事とするやうふことふてハ。金銀を持事ハ出来ぬ者
 あり。是何となく君子の道ハ近し。又人ハ吾を合力を頼
 ます。又人の金銀をかりてかたさぬやうふ事ふし。是天ひ
 ふより志き事也。又貪乏人の金持ハ吾を合力をいひかけ
 大ひふ世話ふふる事あり。又人の大切ハ金銀をかりて
 かつさぬ等の事あり。是又大ひふる悪事ふり。体によ

盗人たりふべし。金持を懐け志らすの。無慈悲のとりふけ
 也。唯已志が物を大切ふ志て。志らぬ返也。何ものろくろふ
 筋ハあり。あるふ巻角金持とするくろくろ人あり。大ひある
 ひが根性也。金持ハ辛抱あり。志き志き思ひあり。行て。
 大ひふより。又貪乏人の辛抱もふく志き志き思ひもふく。
 生皮不精ふ志て。吾性ふるまの物をくいたがり。身命不相應
 ふるごりを好む不智とらふべし。あるふ金持を志らすかりる
 くのふ人あり。世間の盲目多しと志るべし。貪乏人の吾を合
 力をいひ。人の金をかりてかたさぬよりハ。金持の巻しきこと
 一のやうがいらうよきと志しがこし。金持を志らすよりろく

りよ人の香まこときたるゝの人をかりと見て賢人君子の事
 をあらぬ濟あま智恵の人也已あひまが勝うてるふりけを是非
 善悪を弁かんじと考かんて吾性ふとあるハ大愚無智とりの極たひ。
 あるふ詩よ傳うたり秋よんてうらぐりよハ又其上の大愚ふり
 善惡損益と考かんてのまらうくりよべからず
 今度ふ論ろんす所ハ生皮不粒ふ志て身分不相應のふ
 ごとりと好このむ吾性ふうまら物とたべとがゆて貪びん乞ぎす。
 人の事也又隨分と儉約志門をふくらせたり前世の因縁
 ふよつて小縁小身上よて子供後成者多く志てかせ
 ぐふふ川つらざる人の論の外ありての無益の事なり

又何なと智者學生くまやうでも身を治めず家を齊ととの一いつしてハ
 是又無学無智同前也学文ハ何の爲ためふもるや身みを治め家
 と齊ととのつんが爲也あるふ身みもふさめず家も齊ととのつと志て金
 持もちが金をかせずよこそぬとて腹はらを立たてりくひハ大ひある
 悪人あり何なにも金をかすべきや何なにも金を中ちゆうる極たひきや中ちゆう
 ても身の爲ためふも家の爲ためふもあらず志て役やくも立たぬ事ことふ
 巻まひああくするふり金持の目めかかつんを大おほたしけの任しん方也
 吾智文盲ハ返かへしがごとごと又かりたるとてかせかせつつりりのふ
 らずかせるとかへも事を志しらず金をかりると富とみでも落おちと
 ずずふ思おもひ直ちふふごとごとりてああくする後のちふハかりたたづけの罪つみが

日用心法録三篇下

五

重くおつて。孫く貪及するあり。金持やどの男ふまはとこ
 らの事をよく含意志て。慈悲をかせぬあり。あるを世
 間^{けん}あらずの情^{なさけ}あらずのとりひたひふあたらぬ事也。
 又篤^{とく}実^{じつ}の学者あらず。身をよく治め家を齊へ万民を善道^{ぜんどう}
 ふ引^ひへ。天下を泰平^{たいへい}みせんと願^{ねが}ふの事世ふりかたさ
 人^{ひと}とのふべ。あるふ小学文でもありあがら。身持放^{はな}つ
 て。家の中ぶき次第^{しだい}借金^{かき}の出入^{でい}りて。妻子^{しよし}けんぞくあ
 るさせ。家一門へ不義理^{ふぎり}をかりを志て。いひたい事^{こと}をい
 ち^ちり。仲^なく以ておそる志て。よりつさか。いひたい事^{こと}をい
 付^いたふり。あまどいふ小学文である。あま人の笑^{わら}えもさす。

人の下^{しも}ふ立^たちをふかくて。こま^こり者也。歌^{うた}ふ
 ○能^{のう}りて。自由^{じゆう}がじ人^{ひと}よりも。無^なて座^ざある人^{ひと}どとらふとき
 ○物^{もの}ありの。とあやあらざるをこと。愚智^{ぐち}のさあやふ。もろまことま
 ○論^{ろん}語^ごよりの。論語^{ろんご}あらずのせいもあ。無智^{むち}を学^{まな}ぶ人^{ひと}あは
 是^{こゝろ}等の^ら款^{くわん}を志ても。思^{おも}へるべ。恥^{ちぢ}入^いる。あんどよそのあんど
 志^せす。あは。是^ぜの^の志^しもあ。あは。何^{なん}も知^しらぬ人^{ひと}よ。こらうく。いふまこと
 らら志て。くらすの学^{まな}ぶをけがす。悪人^{あくにん}あり。儒道^{じゆどう}の^の罪^{ざい}人也。
 終^{つひ}く考^{かう}つて。あんどよその。あんど志^しりふあり。あは。学者^{がくしや}の^の身^み
 持^も放^{はな}つ。志^して。家を争^{まが}ぶ。人^{ひと}くらす。入^いる。無^な学^{がく}文^{ぶん}盲^{もう}でも。金持^{かねもち}て
 家を志^しむる人^{ひと}あは。いふより。人の物を志^しむる。あは。がらす

がきた。一朱も持事ふりがさう。生皮不氣根ふして。
 家を中ぶる人ふり。世叟の用ふ立ぬ人也。萬民の上ふ於て
 役義入つとめさせらるぬ人ふり。我身たも備むること
 何と云ふ。況んや人を治る事何と云ふ。又たとひ金銀の
 持すたせめて借金せぬやうふ致さべし。たとひ又一旦の
 かりるた。身とくらし。辛抱志て。早速之をべし。又不時の
 入用金も追くふ持するやうふ致さべし。金銀の身をお養ふ
 ふくて。入時云ぬ者也。税候不税候たふ真先ふ入物ふり。
 亦るふ其用意もふく志て。すすの至て。何やうし。不覺子
 方ふり。世の中へ公やむせふも中ふたせがふくして。

らきもせず。け秋先ふも出さう。皆人のよく志りたる。衆
 あり。亦るふ其をよよく合意せざる。見ず志らむもの人と
 同ド。世がふくして。何と云ふ。せがふと。何と云ふ。身よ志
 して志らむ。福があらぬ事也。亦るふ志か。と志らす。ふくして
 入。吾智の甚志き也。何卒け歌の心をよく志りて。金銀を以て
 小持べし。また世がふくして。渡らるる。亦るは渡りふ。こ
 色跡のいさぬ。ふくして。さうさう。さうさう。合カふ。及ハす。
 借金も亦るふ。及をす。無理を志て。やうが。よ及をす。盗賊か
 たり。す。よ及をす。かせ。よ及をぬ。け。ひ。ま。け。を。兼。り。た。し。
 是れ合意の初やう。小根とや。川で。聞た。し。

取金根を持ふ人。身一先身をよく治め。酒宴拵息甚外道
 ありぬ事ハ少し。もよべうす。唯家業を出精し。儉約質
 素をさうり。金根の出道をこし。らつぬやう。み致せべし。無理
 を志て急ぐ。ふためんとせず。唯順道の地道を以て。少く死たぬ
 んと思ふべし。道ありぬ事を志て。大げさふためんと思ふ
 人ハ大ひある。所々あり。山事やまことのありたりたるためし。し
 無理志てふいとりの誤入更ふふし。山事を致し。無理を志て
 ふ位あり。仏神聖人の教ハ。間違ひとある。中々た誤のこ
 とあり。何でも佛神聖人の教ハ。墮がよき。福徳安
 否あり。若其外ふもよき道ありと思ふ人ハ。仏神聖人の教

つの。よき事を志らぬ人あり。正道正理のえつぬ人あり。交
 えて交るべうす。未ふハ大ふんぎをする人。唯け方ハ禮義
 正志ただく情こころと深く家業大事だいじハ身を志るべし。福徳も安かも
 甚中そのうちあり。亦ハ家業不精ふせい。身持みもちもろく志て貪乏くわんぱふふ
 んぎする人。已この色いろがらやちあり。又人換かへ損そんをかけ。かりた
 物ものをささぬ杯あひハ大悪無道おほあくむどうとらふべし。身を治めて。金持かねもち人ハ
 ハ何やどの悪人あくじんと志色しきがこし。貪乏人くわんぱふじんとらふ。金持をさうくひん
 大ひよあつぬ事こと多し。たふむべし。可よふ
 貪くわんのせ。思かんひる人ひとと志。志つて不敗ふばい法ほふのそやかげごとをらふ
 貪くわんのくせ。徳とくある家いへと不ふ且かつたて小家せうかより志て。人ごとをらふ

と貪乏人の全持をそしるは二首の哥みりける。人々能く考つて。貪乏人の方ちやう無学文盲也。無理もひがまも。ましくありとあるべし。是れ全持をひらき表てかくらふよあらず。全持をト秘持せしむるは。自然と無理もいふが。不義理もせぬやふあらずと表て。何卒全持よふりおつとらふ事也

○又全恨のやしのと思ふ人々金好うねよあるべし。我わが杖つゑのく。ある國の商家中くま小知ちぎ八十名取人あり。は人大全持ふり。又公安く出入でいりする町人あり。甚いごうごうやま表く思ひて。申しけるやうやはいかゞおこさるゝを甚いやうよ全恨ハ沢山よ出来ぬ哉やと向むかけをむむは士しひ申まをことけり。我等われら元来全恨なきを

ふたまり申ふといつを町人のいづく。誰たれが金のきつらひある者もの一人もは座まふくの中うちふも私わが探たづねあ至いたて大おほ好よろこふり。命いのちふかへてもやしと思ひたれんとす。ふ中うちくたまふり不ふ申まをふといつを待まちひのいづく。いやくその其その件けん方かたハ金好かねといづくけきた。まのいづくを。元もとは城しろ下したふ欄らんりもか孫まごぶきつしき人ひと一人も是こゝろ請まを不ふ申まをぬ。お其その元もと探たづねあ好よろこと嫌きらひとの沢たけを一向いこうに存ぞん知ちふきと見みつこり。其その沢たけをかこり申まをさん先まへ其その詩うた方かたハ。道具どうぐ好よろこふり。色いろとふ物ものを布ぬいしがる。布ぬいしがまばうら孫まごをふらぬ。かむ全恨ぜんこんがへるふり。はいつまでか孫まごのきつらひといふ沢たけとあるべし。又我われら等らがか孫まごぶきと申まをす。何なにも布ぬいしがらず

かたぬ也。善不善何ぞわしき物の時ハ。いやく金根みま
 ざる寶ふしと思ひて買奉りやめふすあり。家が倦り
 たくても。道具がわしくても。か孫が減ふ。皆やめて。金
 て持て居る。ふりか孫よて持て居る。損ふく。徳をか
 りとどる。人よりりか。やうもあてとまるふり。か孫を持
 ひとを。金か子とらんで。段くとふへるふり。夫も道具衣類
 がわしくても。か孫ふ。金よて持て居る。是備ふ。金好の由
 あり。外の入くハ。よい物物がらむ。ことをか。よい道具が
 らむ。ことを買。見る物。用物をわしが。けて求る。是か孫さ
 む。わらむ。あて衣類。道具。たき也。金根。たき。ぬ。答ふ。我

等ハか孫さき。衣よ。何がわしくても。か孫ふ。又米ハ。且
 那より。黄ハ。沢山あり。是も。儉約。あて。きふ。衣よ。年く。何
 まるふり。又。米の。飯よ。まを。吸へ。身の。盡ひ。たり
 ぬべし。衣服も。外を。つとむ。時ハ。且。那の。外。用。ふ。を。一通り。の
 持へ。置て。是を用ひ。大。奉。ふ。か。る。衣よ。一通り。みて。め。た。ふ。と
 る。く。ふ。奉。ふ。常。ふ。入。え。く。通。り。身。ふ。より。己。る。き
 衣類。よ。て。く。く。す。也。是。ふ。て。寒。暑。を。あ。の。く。ふ。たり。ぬ。若。榮。曜
 か。起。り。よ。い。衣類。を。買。へ。む。先。着。一。す。き。ふ。金。根。が。へ。る。衣。ふ。く。と
 ぬ。ふ。り。女。し。も。か。る。ふ。け。ま。ば。く。く。も。不。自。由。ふ。も。思。ふ。と
 ぬ。ふ。り。又。ま。ま。が。か。孫。さ。き。衣。ふ。女。房。下。男。下。女。よ。至。る。迄。も。皆

か狝きずきふり。か狝きのきさういふ者もの。我わが氣きよしくぬ左ひだり。抱かかへ
 置お奉ほうふり。夫おつと左ひだり下した男おとこ下した女めづめ庭にわも皆みなか狝きずき也なり。是こゝろふり川がは
 て序しよ飯いひをかかりくらせておくよ。女めづめも不ふ豆まめのをふくは飯いひを
 らふものも。あらぶよ思おもふた。あらぶからく思おもひてたべるを左ひだり冥めい加か
 もよしし又また道みち具ぐも沢さわ山やまふふけた不ふ自じ由ゆうかる奉ほうもあり。彼か
 等らもか狝きずきを左ひだり。且かつ川がはの切きり米まいもいのをして。奉ほう金かね根ねを
 ふやす也。卷ま角かくすきこつすを。金かね根ねたまる物ふりとかこ
 らまけを右みぎの町まち人ひと口くちと嚙くはてかつりけるとあらぶ侍さむらいび
 のいふをしごとくか狝きずきふふりを換かへふき者ふり。
 又また金かね根ねのあらぶ所ところ。金かね根ねがよりらる者也なり。金かね根ねのあらぶ所ところ。

然しかる物也なり。金かね根ね入い沢さわ山やまのあらぶ方かたへ来るものふり。げん中
 者もののあらぶ所ところ。何なに平へいか狝きずきふふつて。
 多おほくあらぶ所ところ。
 ○又また金かね持もちふ出息いっせき引ひ息いっせきふ。人のた實じつをやしがる者あらぶ。至川がは
 てよろしからず。金根ねの威光いこうを以て。貪窮びんぼう人ひとののどとび
 をあめりる者あらぶ。是等らの鬼蛇おにへびのいひをのふい悪人あくま
 也なり。是を有あ賤せんかきといふ。金持もちの貪人びんぼうま也なり。哥うたふ
 ○金かね持もちが有からうへも残金ざんかねをふやしたかるを。貪びんぼう人ひとといふ
 ○正ただ座ざ不ふ貪びんぼうよろせと至いたるをふく。欲ほふきを福人ふくまといふ
 とあらぶは二首うたの歌ふてよくあらべし。金かね根ねがあらぶ所ところ。

かゝる貪者との定めがごとし。貪者よ且奉を志つたる
 福人あり。福人よ且奉を志つる。貪人あり。是より別れて
 あるが上も。吾はよ一かゝるを貪人と名付。又人の物と
 まりや一がらす。無欲清浄なるを捨て。くらす是を福人と
 りふ。いづこの道ふも。汝欲知立よ。志て中道の行ひ有たし。
 中山觀音夢物語ふいづく。金銀をこしらへて何の爲ふ
 するや。身一親し孝をそく。不自由ふく。仕へんがためあり。
 又御先祖達の遺善佛事といふとふも。披苦興樂增長菩提
 を務らんが爲也。又我身の用を達し。妻子ひんぞくを養
 るらんが爲あり。又金銀の余半もあらず。身をお慮の施

しもばしたき爲也。唯金銀を握りてをくめて。ためるむかり
 を面白がれて。無性小欲をかろく。たうらの番人よ志て。上
 らをたためる。同ト。儒ふは是を守。残奴といふ。是のまこと
 何まりやめく。事みあらず。何卒親族朋友の難はあらず。
 奉あらず。バカのみ及ぶ。たけに助けたき者也。古歌み
 ○金銀の慈悲と利益と義理と耻身の一代み。つらふべきあり。
 ○平生の我身の上を始末せよ。人の爲み。物をか。むふ
 ○益もふく。孝ふ。全をむ。義理よせよ。まよかの時のい。まごぎ也
 是等の文段をよ。く。志つて。人の人爲道を通るべし。
 ○思ふても。猶思ふ。後一我公名。利欲色と悪友何ん

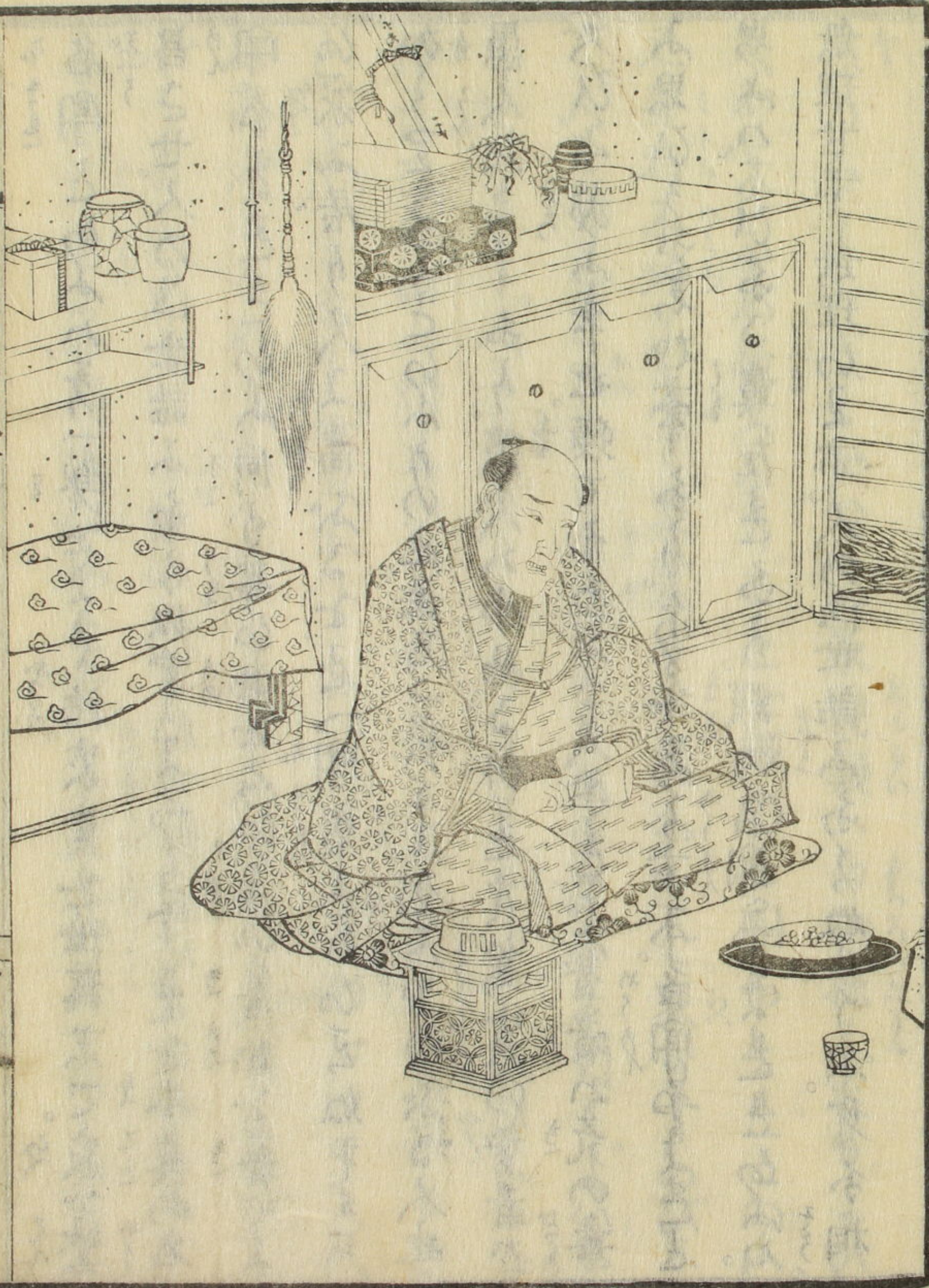
ともゆき名聞利欲色と悪友家業不精とをこり不身持
 我身勝もとの急度ふきやうふとべしけ八つが河川てハ所
 詮安をよ世の送りがごとし。笑ひふらろくあまを其本ハ
 け八つ也其内ふも名聞色欲我身勝もより一切の笑ひハ
 ころとあるべし。ゆふも我身勝も笑ひやどおそろしき
 者ハふしけ我身勝もこ一取てのけををけ世界ハ安也。
 世取中の人と中よ一也け我身勝も身びいさこ一世孫
 ハ貪欲瞋恚愚痴も自然とふくふ川て身も安穩
 ふり世の中ハ大いよらじよ一。何事我身勝も身びいさ
 と少しもせぬやふすべし。呀詮我身勝もが河川てハ人

根在申悪鋪ふり。我身の苦勞も多くあて安ふし一丈
 笑ひとあるべし。又人のふんぎを少しも思ふ事。我身勝
 もをかりす。人の主とも親もところをやうふ事ある者
 也。変て油影すべし。世ハ我身勝もする。人よどおそ
 ろしきりのハふし。人をもそこふいよらじもやるる人
 ふり哥ふ。

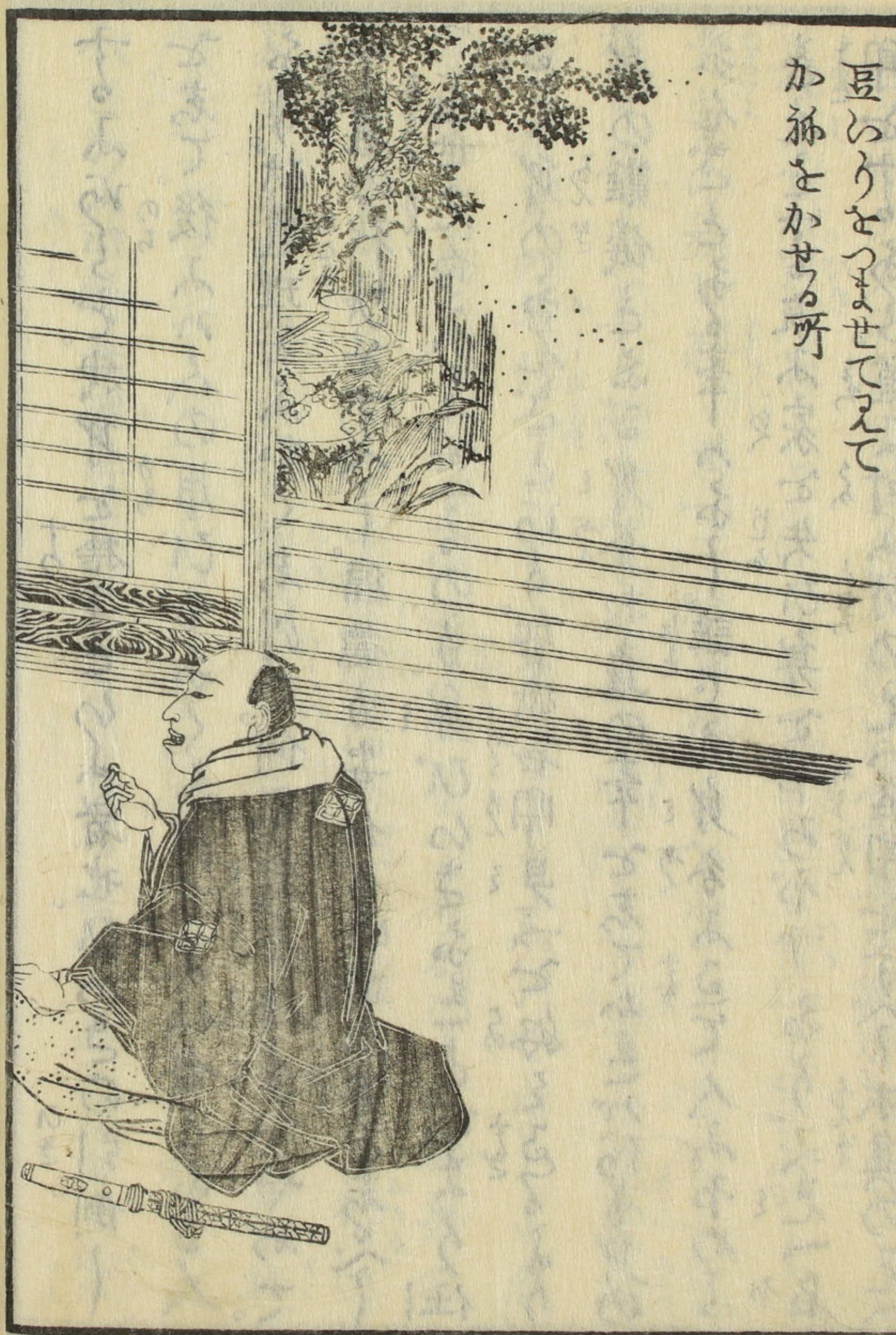
○身を思ふ。人をあつりふよせつひる。親も殺すの也
 ○人ハ勝力ハあまごを角。我身勝もふ。智恵ハふい
 ○身びいさをする。人とも中らわし。身びいさ世孫ハ人と中し
 ○身を思ふ。ををばらるあむる。身をふりよ孫ハ。事こそ安けま

○世の中の人のかききり外ふか。男の我身の我かたきふり
 ○我身を引きたしつひがこせて。生も付ぬくことふどする
 是等の欲を絶く考つて。我身傍を成しむすべからず。
 我身傍を成しむすべからず。人ふも惜まよかきこふも求め後
 ふり我身の不仕合とある。け奉りよく志別て成しむ我
 身傍を成しむすべからず。一切の災ひ是よりなかる。又我身の
 ひいきするあり。ひいきの仕様あり。仁義禮智信を行ひ
 家業を世務とて。家を齊（家来眷属）をよく養ひ身を結
 ふこめて。くらすと。我身のひいきのあやうとよく志別と
 人とりふ。け外無理非道を以て。我身傍を成しむすべからず。我身を愛

するふり。我身を捨るとりふ者也。ひいきの引倒し
 を志て。後ふり人の用ひもふくふりて。不仕合とある人
 ふり。け道理をふかく志別て。何奉り我身傍を成しむすべ
 中道の行ひをすべし。福德も安んず。道ふ有とあるべし
 ○出世文向ふ。こつをするのも。身びひいきふこと。ひまう仕
 して。身のおんぎとあり。皆け名聞見つと好むるあり。
 身の難儀とある。身分おの事と志て。かまはれも身の
 おんぎとある。奉り入る。誰でも身おんぎと志て。人ふやめら
 せんとする。おん家を失ひ。身を成しむすべからず。又見一名
 聞をするあり。道し時ふ所のえ一名聞をすべし。本真のえ



豆のうをつませてえて
加祢をかせる所



名聞なもんとりふハ。身み一身いっしんをよく治ち。家業かごうを世務せごとて家いへを繁さか
 昌さかさせ。人の世語よこごふあらしぬやうう。くすすを本真ほんしんの名な
 聞きやまことまこととりふ。何も其その物ものをさくくふ。ふの着物きものを着きてよ
 の家いへに居ゐり人ひとは高たかぶるをえつ聞き名なとりふらぬ。そままの
 かうまきことまこととりふりの也。至いたてころろろ。似にてやるぶる人ひと也。
 愚人ぐんたままししふり。愚人ぐんのやめるけままた篤実とくじつの智者ちやうの
 大おほひふふ幸さい也。頓とんてやるぶる人ひとふまをま。智者ちやうのま毒どく
 小思せうしひひふ志しむ幸さいふり。ああをまああららずま。名聞なもんやまことまこと
 男おとこふり。大おほひふる鼻はなたままふり。誠まことの名聞なもんやまことまこととりふハ。
 無理せず。無理むりのまま。人の世語よこごふあらしぬやうう。身みが相あひま

應おうのちりりをまするまのりり。一家親類いっかしんるいハ勿論もちろん他人たにん返かへすまふま。
 人志じんしやとまめ敬うやまつふまふり。こまを誠まことの名聞なもんやまことまこととりふ。
 又また身持みもち不埒ふちやうふまあて。家業かごうも不精ふせいふまを家いへのすまのびま
 て。人ひとの笈うしとまま已おのままも難儀なんぎふ万まん也。こまふまよまりてまふま。
 りまのまこま。人ひとは高たかぶるまやめるまとまするま。大おほひふるまを
 得遠とくちがひ也。付つを得遠とくちがひハ世間よこご一体いったいよまあて。異い兄けんの仕し様やうもまこ
 とましまうまもまふま。世よ界かいふまふまべてま。唯ただよまさま形かたちをまのまこま。人
 小高たかぶるまやめるまとまするま。人ひとをまかりまふま。付つれまよま皆みなびん
 不ふうまふまんまぎますまふま。誰たれのま人ひともま付つを得遠とくちがひまふまきまやまふます
 登のぼりま。若わきまよま公こう得遠とくちがひまをま一生いっしやう貪あま之の神かみふませまめますまて。

人ふ何やまろをいかにんで。くろさ孫がふらぬとあるべ
 一。こまふよつて。実小人よ不めらまたくが。身をよく
 不さめ。家をよく齎つて。身をお衰の暮しをゆるすべし。
 身猪の事よ付て。人の世話ふあらぬやうよすべし。夫
 小て其身の一人役のむ事也。又餘力の何つて。人の世
 話をせむ。夫程よき事なふきとあるべし。身上の事よ付
 て人の世話よあらず。ふらす人の誠の名聞不まま
 とりふ。是を代身の愛者やうを志つてよの人とありふ。
 け道理をよくあつて。
 ○昔より。身とよく治め家業を出精。あて。金根を持

者ハ一切の人ふ不めらと自由自在を得て。人の上とある
 人也。皆け道理をよく志つて。金根を沢山小持て。一家
 一門の頭とあるべし。是ゆらうざる世話ふきども。かろ
 泰平の御代よ生きて。悦びよろこんで。くろさべき苦あ
 り。世がらる人機がらる金つまりて。くろさぬとあり
 かり。あて中。方換の依み何ら。ずとあり。事也。世の中も
 人機も悪ふ。唯人々が身分不相應。ふらる。家の事あり。
 外も子細あり。世も人氣もくろくあり。今でも。藏達
 人の沢山あり。唯奢りの。事ある。若が。貪ふふんぎ。すん
 ぶ。何卒奢りの。事ふきやうよすべし。け。事さ。いふ

けを安んずる世の中也。亦を世も人氣もさるるべし
 人くも前くの仕方のさるるべし。事とよくあるべし
 何でも身とよく治め。家業を大事に儉約して
 世の中のごんきりするに上下たふらざる事也。ごりご
 世孫を安んずる世の中也。昔に軍がわつて一日も安んず
 たましく貯へる者も。悪黨たが来て應に持たふり。盗人も
 かごりもせんぎする人あり。上下乱れてつら合の世の中
 あり。つよい者がかちよきて。毎日のけんろく論あり。或は
 能ふを盡さう。死する者多し。或は財の生来ぬ時
 ぶを士農工商たふ大難波の世の中也。夫も短の事あり。

保元平治より慶長元和迄四百余年の間也。天下の合
 戦のちもことあつて四民一日も安堵の思ひなしあるふ
 聖神の御武徳に依て。天下泰平の御代とふり。四民
 鼓腹をうたへること。衣を著かごり花見桜山ふ日を暮
 何所よふんの悲もあらず。自由自在に遊びあは
 り。何りがごき世の中也。狂哥よのうまの物。ふみて榮花ふ
 ひまがぬ。戸ごぬ御代とらふは時と口号。神武以来
 あり。今の世の中は何と表て悪補事あり。神武以来
 かさふよく治りたる世の中あり。津く浦く近も。或は
 の波風もあらず。泰平ふ表て。戸ごぬ御代とらふはこの時也

日用心法鈔三篇下

三十九

是福徳を增長する人也。若又よの衣服を先へ着たり。うまい物を先へたべる人の。天の冥加ふりて未よの貪乞ふんぎする人あり。何卒身ふよりゆるい衣服を着を脱び何ぢふい物をたべるを脱ぶ人が。布しき者也。け事ハ天職。天物とりよ書み見へころ。け道理ある事をよく表わして急度儉約せしす極し。

○尾刈知母郡大野とりの所。彌兵衛とりの金かせあり。け人誰ぞ金をかりみ来ると先豆いろをつませて見て。金をかせるふり。け人よの金をかせても。ふかるふと。思ふ人あり。ハ先茶といは茶葉子よとて。豆莢を出て。色くふをふしを

表ふがら。も前ふもたべかりみ先と人よも。たべさせて。根子とるるあり。其豆いろを。小粒ふ豆より。段くと大粒ふ豆より。粒ふ豆をひろいらふ人あり。金をかせ。又大粒ふ豆より。段くと小粒ふ豆を。らふ人あり。金をかせずみこと。とりをゆいあり。是ハふせふも。小粒ふ豆より。段くと大粒ふ豆を。らふ人あり。先何ぢふい物を先へたべて。うまい物を後ふたべると。いよ。姑末のよの。天の冥加を。表わする人あり。け人かりたる思を。表わして。をふりけて。金子をか。け人あり。又大粒ふ豆より。ひろいらい。跡ふて。小粒ふ豆をたべる人ハ。天の冥加を。表わす。先うまい物から。先へたべると。いよ。おごり着

也。大切ふ金根さかりあがる。其大恩を忘として。かす事
 をあつね不実のありと見て。金をかせずとらふ。拙
 事とためー。ころふ大方間遠ふー。うまい物をまいた
 べて。あぢふの物を跡でたべる人の不始末の也。いづと貪
 乏ふんぎする人あり。金かせぬもあふりととふ。いけて天
 の冥加をあらたる者あり。ころの衣服をさきつきるやうふら
 ー。あぢふの物をまいたべるやうふらとす。あかやうふら
 がけふを。貪乏致せりの人あり。あつねるべうら。あつねる大方
 の人がよい着物をまいたつきつごがり。うまい物にうまい
 とらふて。あつねる人むかりあり。福德のあきさ苦あり。果

報と取こして。福德を失ふ人也。都て貪乏人の仕ごとを
 考へるふ。よい物があつねるを。あつねる。あつねる。あつねる。
 何をまいたつたか。是幸抱のあきさ。不始末の人あり。
 又たましく金根のふら入事。何をまいたつても。月夜ふ来の
 飯の氣よあつて。何をまいたつても。あつねる。あつねる。
 意よするを。あつねる。あつねる。あつねる。あつねる。
 又て。質をふき。又の高利の金でもかりて。あつねる。あつねる。
 あり。其後入。あつねる。あつねる。あつねる。あつねる。
 急度辛抱あつて。あつねる。あつねる。あつねる。あつねる。
 不実とあつて。あつねる。あつねる。あつねる。あつねる。

日月法鏡三篇下

三三

逆さかひて身みををるるががすす人ひと也なり。是こゝろ何なにををととりりふふ。福ふくををととり
 ここすすああふふりり。何なんでもでも今日けふよりよりのの明日あしたがが大事だいじ。今年ことしよりよりの
 来らい年ねんがが大事だいじとと後のちのの用意よういととすするる人ひとででああららててのの役やくとと立たぬ
 人ひとあありり。何なんでもでもよよいい物ものとといいままららしし。こころろのの物ものととままへへ
 ををふふややううととすすべべしし。左ひだりとと右みぎをを天あまのの冥みやが加かふふ時ときひひてて福ふく徳とくも
 要いふふももけけいいふふあありりととああるるべべしし。今いまはは彌や兵へい衛ゑのの全ぜん限げんとと至いたるる
 てて大だい切きととすするる男おとこあありり。全ぜんだだんだんだももよよりり。出だしし入いるるふふのの水みづを
 ををひひ。其その上うへふふてて。だだししののままととすするるあありり。是こゝろももむむあありり命いのちととすす
 二ふた番ばん目めのの大だい事じのの全ぜん限げんああままをを左ひだりもも右みぎももああららすすべべききととすすととままと
 庶しよ末まつととすするる道みち理りあありり。何なんもも入いららぬぬ彌や兵へい衛ゑのの全ぜんをを成せいくくかかり

ててののままととすするる直ただふふたたををとといいままへへとといいままららしし。アア彌や兵へい衛ゑ
 ののままかかああららずず。こころろ其その全ぜんふふのの女めづくく癡ち何なんりり取とりりててまま
 ととべべししとといいままてて取とりり。其その後のちののままととすするる貴き様さまががややううああ
 庶しよ末まつととすするる人ひとよよかかせせるる全ぜんああららずず。外ほかににああららずずとといいままららしし。此こゝろ方かた
 のの全ぜん子すののかかせせががこころろとといいままててかかせせああららずずとといいままららしし。事こととと申まを
 たりり。是こゝろもも又またむむあありり。全ぜん限げん入い世よ界かい第だい一いつのの寶たからああままのの大だい切きとと
 すすべべききととすするる也なり。ああららずずとといいままららしし。又またのの腰こしああららずずとといいままららしし
 るる杯たい入い大だい切きととああららずずるる馬ま庶しよ者もの也なり。是こゝろのの大だい切きとと肉にくふふ
 ととこころろへへののままととすするる持もつつべききととすするる也なり。大だい全ぜんああららずず。朋とも卷まきふふとといいままららしし
 事こと勿な論ろんあありり。全ぜんのの持もつつややうう至いたるる大だい切きあありり。若わ持もつつややううとといいままららしし

のと入よとらうまらる事あか。まうあか。ふつと湯のやうよ。和仲教や
 みざりめあか。とつあか。持と。定九郎あか。えあか。やうあか。ああか。悪人あか。よ直あか
 み取あか。とてあか。まあか。まあか。ふあか。全限あか。入用あか。ふあか。よあか。くあか。持あか。べあか。易あか。よあか。慢あか。藏あか。誨あか。盗あか
 とあか。のあか。事あか。ありあか。けあか。むあか。のあか。藏あか。のあか。役あか。りあか。をあか。慢あか。くあか。ああか。てあか。置あか。入あか。盗あか。入あか。
 肉あか。のあか。寶あか。物あか。をあか。取あか。まあか。とあか。誨あか。るあか。やあか。うあか。ああか。者あか。也あか。是あか。よあか。間あか。遠あか。ああか。りあか。
 用あか。ふあか。のあか。惡あか。業あか。よあか。よあか。引あか。てあか。盜あか。をあか。招あか。くあか。事あか。ありあか。をあか。得あか。りあか。べあか。りあか。
 ありあか。人あか。のあか。いあか。らあか。くあか。金あか。をあか。かあか。りあか。てあか。請あか。取あか。てあか。甚あか。どあか。よあか。ろあか。こあか。ぶあか。人あか。
 ありあか。けあか。入あか。のあか。借あか。金あか。をあか。ああか。まあか。りあか。苦あか。みあか。せあか。ずあか。ああか。てあか。かあか。へあか。さあか。ぬあか。人あか。
 ありあか。又あか。金あか。をあか。かあか。りあか。てあか。請あか。取あか。てあか。かあか。りあか。るあか。かあか。りあか。とあか。けあか。まあか。かあか。いあか。をあか。
 ああか。てあか。かあか。つあか。さんあか。とあか。業あか。事あか。をあか。よあか。てあか。持あか。新あか。入あか。のあか。借あか。金あか。をあか。苦あか。みあか。ああか。

てかあか。つあか。とあか。人あか。ああか。りあか。かあか。りあか。るあか。かあか。りあか。とあか。けあか。まあか。たあか。何あか。卒あか。首あか。尾あか。
 然あか。とあか。たあか。さあか。りあか。のあか。ああか。りあか。とあか。をあか。ああか。りあか。けあか。てあか。かあか。つあか。すあか。人あか。ああか。りあか。
 初あか。めあか。よあか。かあか。りあか。とあか。人あか。のあか。金あか。をあか。かあか。りあか。とあか。富あか。であか。もあか。取あか。とあか。やあか。うあか。よあか。
 思あか。ひあか。をあか。ああか。りあか。んあか。であか。かあか。つあか。とあか。事あか。のあか。ああか。りあか。ぬあか。人あか。也あか。又あか。後あか。のあか。金あか。
 をあか。うあか。りあか。たあか。入あか。のあか。隨あか。分あか。とあか。篤あか。実あか。のあか。人あか。ああか。りあか。かあか。りあか。かあか。せあか。のあか。
 相あか。談あか。をあか。ああか。てあか。もあか。よあか。ろあか。かあか。るあか。べあか。りあか。又あか。初あか。めあか。よあか。りあか。かあか。つあか。とあか。ぬあか。
 氣あか。であか。かあか。りあか。るあか。入あか。ありあか。かあか。りあか。とあか。すあか。是あか。をあか。業あか。とあか。やあか。うあか。よあか。ああか。りあか。
 人あか。ありあか。其あか。くあか。せあか。たあか。かあか。ああか。りあか。まあか。いあか。事あか。をあか。かあか。りあか。りあか。てあか。人あか。
 をあか。だあか。まあか。すあか。不あか。実あか。者あか。ありあか。をあか。ああか。てあか。油あか。断あか。すあか。べあか。うあか。とあか。むあか。取あか。合あか。へあか。
 かりあか。ずあか。若あか。けあか。入あか。よあか。金あか。をあか。かあか。さあか。バあか。例あか。川あか。へあか。投あか。也あか。もあか。同あか。前あか。ありあか。

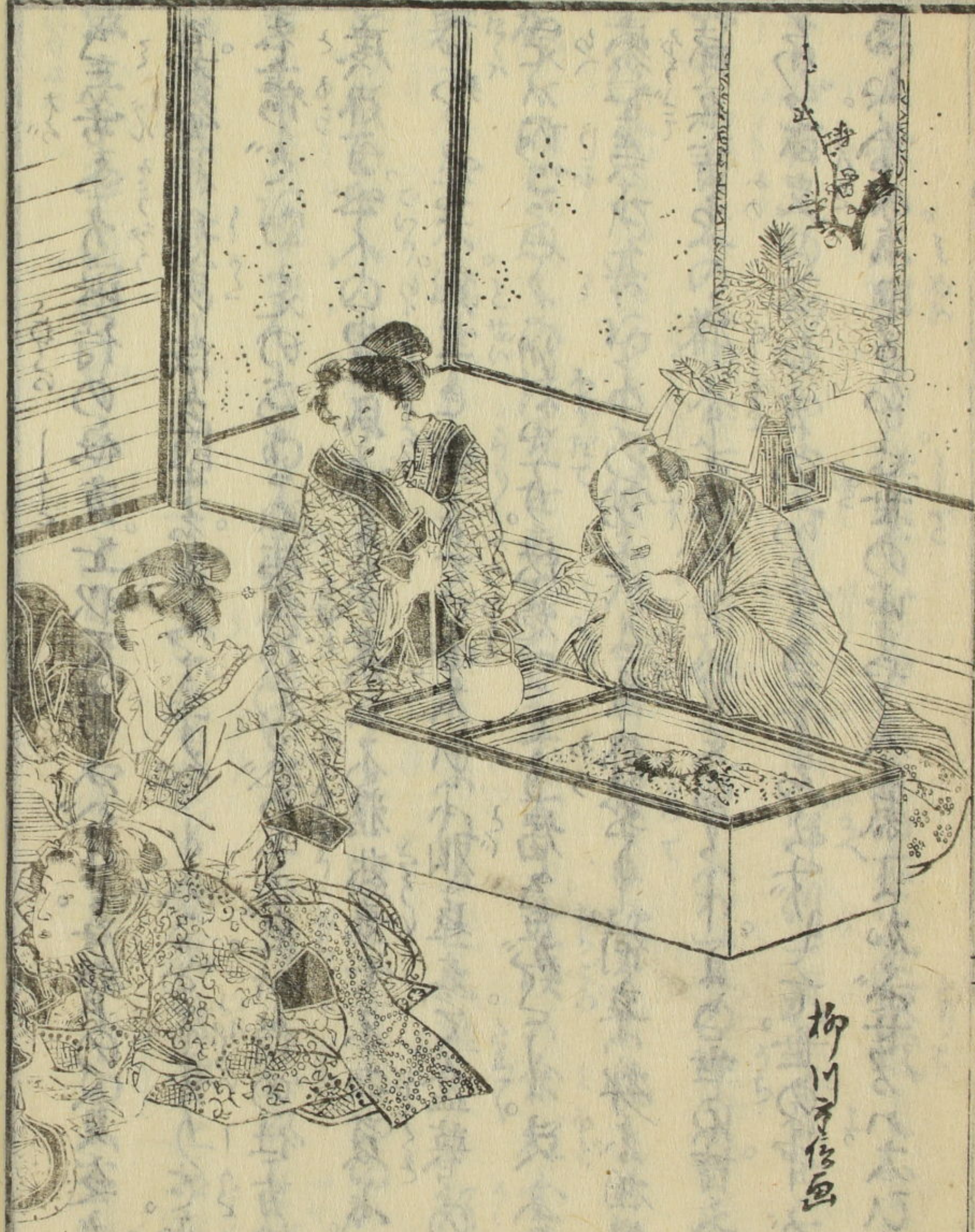
若かこ秘入あうぬ事わうが。進上と書てのしを付て
 をりすべし。又あまうりあやまひてかりよ来る人も
 かアふりのころき人あり。いづともあても。全を持て
 うせる人くは。此事を考へあふ。世に世にわらわらぬ
 ○お身上持とりも。其換ふお子鋪事よもあうす。唯入
 と量りて出さむ。あまうり天間遠のあうべうらど。あふ入
 より入出る方がまきさあふ。劫定のあうぬ善也。是より入
 入のまう出す事ハ。あふさやうふすべし。又左換ふあり
 が。こしとりの入のうつけりのあり。我より小身上の者
 こ一適まうらすとえてハ。左換よあうぬとりの入。私あり

とせい ー ー ー
 渡世ハ仕換ふよ例て。必安く出来る者あり。あうとあう
 愛思ふハ。其仕換あう事と。あうぬあふり。我換ふいらく。
 何の國の諸家中何某不あふの難ふて。浪人あけるが親子三
 人京都ふおあまう町人と候りとあて尋福来り。けせの
 浪人の身とあうり。一月を送る。畜一もあふ。まうして是近
 何可渡世の事を覺へたる事あり。何らと年以の慈意
 ふ。何ぞ家業よも取付あうやうふ頼入と申しけをを
 亭主申てあう。やと兼知らう。たり併し何ぞ家業の
 たりふもある事をあう。あうらうやと。たけ孫けをべあう
 本綿糸をらる事のと覺へたりといひけをを町家の亭

思ふ者ハ未明より仕奉と志て一月の奉を取裁しとろこふさし
 まる百丈のゆゑまのふ号まらざるを又帰えつてから夜をこめて
 一日百丈の都合をりこしける又常ハ一日の中うち百丈も
 ふけきを其のとり休やすきたき者ハ務あてめ次身つぎも休ませける
 かくのごとくわうだての法立を志てらるすれハ近頃ハ余程金子の
 貯たくわへ出交とせ渡世も樂くとありふけると也誰たれくも新身
 とつめて出入いりの費用をよくあつらふを渡世するハ何のかた
 き幸々さいざいありんとありけ侍さむらひの身上みんまの持もちを以てもて
 を渡世わたり仕方しほうよし例てどふでもある者也我身われみとお志ふ
 法立を志てらるすれハ上う下げたよらるるまぬとりのまハあ

き苦くなり此侍こゝろの仕方を以て考ふべし無智むちの貪あまみ入いた
 身分みんま相應おほの法立を志てらるすべし入いるををりて世よと
 を何ぞなにか定さだまのゆゑに事ことハあるべしとけ侍さむらひの仕方を急
 度用とあのべしある人ハ家業かぎハ不精ふせい志て不おお救すけふかご
 るから志て入い立たと出いるいとがい大おほい相遠あうゑん志て金暮かねくの効
 定さだまのゆゑにいけあり鉄炮てつぱうよても届ときがごとし夫おもてハ
 家を失しひ身みをいゆるいがすいより外あふし何卒なにぞ身みを相應おほの
 法立ほうたてを志てらるすれハ随分たがとらるすれハよき世の中よあり
 ありハ已いま仕方しほうのゆゑにいきと志てらるすれハ世の中よがら
 るい人氣じんぎがいらると世の中よや人氣じんぎよかふせるハ大おほいふ

餅ついで七五三の例て正月に
 ゆるりとすゝの常の始末を
 常みの家業仕舞あて正月の
 親子兄弟あちく掻き居る所



柳川信画

あつてぬ事あり。かごりさつせ福を。あまうふんぎのあつ
 登うらふ。あるふ向のえすやもふ。かごるからきて。毎
 年劫定のあつぬ善ふり。たとへむ百兩の身上の或百兩の
 くらうととる。あつむ七月より十二月迄のくらうの何を以
 てとるや。兼りたり。天より飯米のふりもせま。小きひ
 の地よりくらきもせま。大晦日の劫定のあつぬを河あり。
 羊年分の出所あり。少くの事ふらふ。大たふす也。善盤
 も劫定のあつぬ。あつ切つる身上つづ。也。終と思ふす。也。
 ○何卒身介より引とりて。全根の出道のまうあつぬやう
 あり。世の中とらうすべし。若又貴族がらふやうあり。と

一。世の中の風俗あつを仕方あり。とりふ人もあつんま
 の智恵あつ。のうつけりのがらふ事あり。世の中の人
 火よ入水ふらふ。己をゆり。益きや。九族よりのことすま
 ず。あつ。己が仕方のまらさ。いひぬけの言ふあり
 己が好む事ふり。興あり。己が嫌ひふ事ふり。とせ
 ぬ。といふ。我徒者あり。一。若量の君子。世の中の人よ
 かまらぬあり。身をおもふ。身緒の好む所を通るあり
 世間あり。といふ。小事の時の事也。大事ふ及んで
 世間あり。といひて。居てすむべきや。我身緒がらう。あつ。と
 時。あつ。人もかまらず。よりつ。きもせぬあり。智者の

日月八三金三卷一

あるべし。係あ一苦勞くらうを久鋪ひさしくすまを。成なくの樂たのむにあ
 きた。苦勞くらうふし。小樂せうらくといふ事こと入い成なてふ事こと也。歌
 小せうの樂らくといふ物もの入い年中ねんぢゆう苦勞くらうを志しむ。一が内うちの休やすま
 よどあるといふ。是こゝ小間せうま遠とほふし。一切いっけつの人ひと年中ねんぢゆう苦勞くらうを志しむ。
 家業かぎふをよくつとむまを。樂らくといふ者もの入い其中そのうちよ成なく
 あり。是こゝが誠まことの樂らくといふ。け外けいよ樂らくといふ物もの入いふ事ことと志しむ
 べし。此こゝ外けいよ求もとめて樂らくを志しむ。樂らくといふ物もの入いふ事ことと志しむ
 跡あとよて直ちかふ大苦おほくらうといふ。け外けいよ賢けん人ひと君子くんし入い樂らくを志しむ。求もとめて
 小せうとす。唯ただよく身みを脩しゆめ家かを齊せい一國いっこくを治ちむると樂らくといふ
 志しむ。酒しゆ真ま狂きやう與よ杯はい入い成なて。樂らくといふ事ことと志しむ。唯ただ無む事じを

樂らくといふ事ことと志しむ。入い愚ぐ者もの入い樂らくを志しむ。求もとめて樂らくを志しむ。後のち小大せうだい
 苦く慮りを受うけ。又また年中ねんぢゆう苦勞くらうを志しむ。家業かぎふを出で精しやう一儉けん約やく
 質しつ素そ小せうとす。人ひと入い大晦日おほみそひの晚ゆふよ入い早はやくか。佛神ぶつじん一
 燈明とうめいをけ。家内かうちをあう。志しむ。年越としこしの法はふ飯はんをのく
 とたべる人ひとあり。此こゝ人ひと入い又また来年らいねんも安やすを志しむ。子こといふ
 花はなの咲さたる人ひとあり。又また家業かぎふ不ふ精しやう一志しむ。けんけんのけんも。せ
 小せう暮くれす人ひと入い大晦日おほみそひよ。佛神ぶつじん一燈明とうめいもけ。行あん燈とう
 もといふ事ことと志しむ。我家わがやも。希まれる事こと一叶いつはとす。志しむ。余よ所ところ一約やくか
 く志しむ。希まれる人ひとあり。け人ひと入い又また来年らいねんも大おほひよ。志しむ。志しむと
 け。小せう暮くれの咲さたる人ひとあり。け。志しむ。至極しごくといふべし。又また年

日月八之鏡三層

三十三

中家業を出精志てけんすくよらると人ハ。実ハ年中
 も一生も安かよらるとす人あり。人間の樂ととり入る
 位の事也。是が人間分相の樂とありけ上の樂とを
 求むると直ハ大ひふる災ひのりて大苦痛を受ると
 あるべし何事も中道のよい野を通りぬるべし。是善
 事よ志て。福德安かの来る道あり

○大年ハ常よことあまつとむまばのりも正月住吉の松
 餅ついで七五三をりて正月とゆかりとするハ常の始末ぞ
 一生つとめ働ひて死を待ハ福德のりつまる所也。け道理
 とよく志りて。身をふさめ家業つとむる事を樂くと

すべし方とまは先祖父父母の恩も報下奉り。且又
 此子孫繁昌も其中ふありとあるべし。何事此本と五
 度も七度もよくよんで世の中を安かみらると。二夫と
 すべし立身出世をあらざるも貴賤上下たみ。安かよ
 ぬをたべんが為也。其外の名聞威勢ハ末の事也。この
 道理よよく志りて。節と安かよ。たべらまらるるが。其
 外の事ハ運入任せて。とろくところとべし。無理ハ全根
 を不しがらよ。及むす。無理ハ出世するよ。およむぬ。唯家
 業と出精志て。仁義忠孝。儉遜を専らふす。是
 ど誠の福入聖賢とらふべし

日用心法鈔三編下大尾

因ちかふあるす。身みを治おさめ家いえを齊ととのむるといふ内うちふも随ま分ぶん
 と後生こうじやうを預あひ念ねん佛ぶつと申しぬべし。家いえを齊ととのむとて
 中途ちゆうとよて死しす。人ひと多おほく後生こうじやう預あひ事ことハ子供こどもの時ときを
 急いそげたさ者もの也。何なに時とき死しせんも志しまがごとし。急いそ度ど用もち
 念ねん佛ぶつと申しぬべし。若わ若わ男おとこ女めた不ふ常じやうくは念ねん佛ぶつを
 ぬべし。是こゝ人ひとは是非ぜいひたふ大だい入に用もちの事ことふを若わこ時とき
 より念ねん佛ぶつかけし唱なめぬべし。今いま成なりふかけると未いま
 みて大だい德とくをす。事こと也。成なりふても善ぜん事じの種くさねをまけを未いま

来こふて一粒ひとつぶの功こう德とくと得とるあり。善ぜん惡あくたふ種くさね成なりふ
 こと也。實まことの所ところハ大だいひ也。こと小こ依よく惡あくをす。不ふと損とんある
 物ものあり。成なりふをかり惡あくを去さても大だいひある。苦く患げんを受うる也。
 又また善ぜんをす。不ふと德とくの物ものあり。成なりふをかり善ぜんを去さても
 大だいひある。功こう德とくと得とる也。然しかるに愚ぐ人にんの善ぜん惡あく得と失しつがよから
 ぬ。成なりふ惡あくを由よし悲かなしむ。善ぜんを由よし其その様ようみ好こまぬ也。智ち者ものの
 善ぜん惡あく得と失しつをよくある。成なりふ惡あくを由よし悲かなしむ。善ぜんを大だいひに好こま
 んでつよく成なりふ也。是こゝ惡あくの成なりふをかり去さても大だい損とんとふ
 り。善ぜんの成なりふをかり去さても大だい功こう德とくとある。成なりふ也。こと小こ依よ
 くと惡あくの成なりふをせぬ。善ぜんの成なりふをす。成なりふと成なりふと成なりふと

○ありくころ。わらわのできつる。せいのかむむ。あつまのむげん。毛の白くある
 ○ふりあつて。身はよろつく。齒のぬける。耳まきくある。目かまきくある。
 ○らどくある。氣短うふある。ぐちふある。思ひ丹事。皆うつくある。
 ○聞くころ。死ともあがる。さむしがる。物らのさがる。廿二守きころがる。
 ○又あつても。同トトことをみ孫。わめる。建者。自まうん。よ人かひやがる。
 ○身ふとみ入。取中。あり。巻。杖。目か。孫。たん。や。えん。争。あ。びん。孫。の。ま。
 ○此六哥。仙を見く。老人の役。ふ。ま。ぬ。事。を。よく。ある。べし。け。ま。り。
 ころる。あ。あ。びん。孫。の。ま。追。の。三。十。二。の。ころる。の。所。が。何。れ。と。い。ふ。の。
 表。や。む。の。用。み。の。ま。ま。ご。こ。一。此。世。の。人。み。の。あ。ら。ず。あ。ら。く。冥。途。の。
 幽。霊。仲。間。也。死。入。も。同。前。ふ。ま。ま。を。何。で。も。か。で。も。後。生。を。預。ひ

の念佛を中し。まよふべし。今の身むうりか。まのいづれ。後
 生を預ら。孫む。後の身を捨ると。いふ者也。今の身も大
 事。又後の身も大事也。我身。我。か。か。い。い。か。ら。孫。を。あ。ら。
 ぬ。と。ある。べし。現世。未。来。た。ふ。入。の。頼。ま。ふ。あ。り。が。ご。一。我
 身のころ。ま。ご。大。切。み。せ。孫。を。あ。ら。ぬ。是。み。よ。何。れ。と。い。は。せ。の。身。
 を。よく。治。め。家。業。を。ま。務。ま。て。安。ふ。よ。く。し。未。来。の。自。身。
 ふ。か。ま。か。け。く。の。念。仏。を。中。し。極。樂。往。生。を。致。を。登。し。
 地。獄。つ。落。う。の。あ。ん。ぎ。子。万。也。一。切。の。福。徳。を。失。ひ。子。孫。を
 守。る。事。も。由。來。が。ご。一。是。よ。よ。何。れ。と。い。は。せ。何。で。も。か。で。も。不。老。不
 死。神。通。自。在。の。佛。と。あ。ら。孫。を。役。ま。ま。ぬ。と。ある。べし。是。の。ま。ま。

が御城みしろをいふまごが知り是のまごが賤寶せんぼうといふまごぬ死
 孫みまを皆置おきくゆか孫みまをあらぬ。金銀財寶かねぎんざいぼうの取置おき貯たくわふの
 我われかゝるまご置おきて孫みまをあらぬ。若わかくもかふる身の
 うへふり。哥うたふ

は身み今いま地水火風ぢすゐかふうとこにかきふがらぐらみむきてまごを求めん
 誰たれも皆みな終つひみの野邊のべのがらとつと。若わかくもかふる南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつとて

でも御大各様方みおほおんさまかたでも。捨す盡げ本持ほんぢくみ供ともする者ものあし。
 金枝きんし先まへ箱はこ成なり徒た若わか黨まうも役やくふまぬ大勢おほせいの御家みけ来きふま
 た一人ひとりの供ともする者ものあし。唯ただ序しり一人ひとりの死し出での旅たびま也。御城みしろの
 知しりもよし御位みゐも。未いま來きたの用もちふもつともまがら。唯ただ未いま來きた

の用もちふ立物たちものハ。念ねん仏ぶつの法ほふ南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつの一行いっぎやう也
 一天いつてん万ばん葉えふの

天子てんし様さまでも冥路めいぢの使つかひ入道にんぢまよと下した。智謀ちぼう勇武ゆうぶの良將りやうしやう
 も無常むじやうの殺鬼せつきを防かへぐ事ことあつとす。けねふ

釋尊しやくそんも梅檀ばいだんのけむりみむせびむひ六通ろくつうの羅漢らかんも要えい
 滅めつの波底なぢふ沈しづまふ。況いはんや人間にんげんの甚苦しんくとあるべし。皇極こうごく

天皇てんかう冥途めいぢよとよとむの御歌みうたふ
 〇うらむらみ人間にんげんのけむりみむせびむひ六通ろくつうの羅漢らかんも要えい
 一天いつてん万ばん葉えふの天子てんし唯序ただしり一人ひとりとぞく物也。況いはんや其外そのほかの者もの凡たゞ猶なほ

更さらの事こととあるべし。とまよふのけむり冥途めいぢの旅たびのふんぎを深かほ

く志願して後生を預ひ。念佛を唱へるべし。念仏が二
 唱つたを仏の浄來迎み預りて光明かくすたる仏の浄後
 ろみ身く。極樂へ往生すことを。くさき道を通る事ふし。
 ふんぎあんちう少しゆふし。唯飲堯由やく志て極樂へ
 往生するありこそみよけり。念佛を唱へるべし
 大集經ふのり。妻子珍宝及王位臨命終時不隨身と
 ありけむ。妻子でもけり。ころお寶でも御城でも御殿
 でも。知りでも。王の位でも。何でもかでも身入随入物入。つ
 もふしけむを哥ふ
 つまも子ゆ。智恵も寶も身入と入す。念仏のそぞ死の道連

○世の中ハ唯頼むふありとて。人も身も。金も命も
 親子兄弟でも主従でも頼まふある者一人もふし。唯頼
 みある者入預ふ。後生に念仏の一行也。夫もまの事ふの
 あら。明日も志まが。月日ハサツサくとも。目
 をすめて鼻をかむるふ死るから志て。其用をふさるべし
 ○孫もん徑ふのり。人命の止まらざる事。山水よりもの
 たり。今日ハ存すといども。明日ハ又持ちが。いんそ
 公をわし。いさふ志て。要法を求むるとあり
 ○きのふのけむのり。つ飛も川流してをや。月日ありけり
 ○けふの目も暮るむ。命をせむる使ひありけり

孔^{らう}のや念^{ねん}仏^{ぶつ}にかなだく目^めの志^しぶくか^からざる^{ざる}き^きの
 つまりの^{つまり}あ^あびた^{びた}く^くせん^{せん}かう^{かう}入^ま眼^{がん}をつ^つる^るむ^むり^り也^也
 極^{きよく}悪^{あく}人^{にん}よお^お遠^{とほ}ふ^ふし
 む^むる^る目^めとて^{とて}の^のあ^あき^きど^どか^かし^しぬ^ぬか^かふ^ふし^しや^や世^よ渡^{わた}り^りの^の大^{だい}描^{びやく}とて
 も^もす^する^るど^どか^かし^し人^{にん}と^と生^{せい}ま^まし^し印^{いん}入^まる^るど^どの^の道^{だう}よ^よ入^まぬ^ぬじ^じ種^{しゆ}
 の^の法^{ほふ}門^{もん}皆^{みな}解^げ脱^{だつ}さ^さま^また^た九^く夫^ふの^の我^が等^{とう}入^まる^る殊^{しゆ}院^{いん}本^{ほん}預^よふ^ふ志^しく^くの
 ぶ^ぶし^し其^{その}本^{ほん}預^よふ^ふ唯^{ただ}祇^ぎ名^なに^にを^をか^かり^り入^まる^るや^やス^スべ^べし^しや^や世^よを^をあ^あら^らす^す
 引^ひ接^{けつ}す^すと^とい^いふ^ふ又^{また}兼^{けん}好^{こう}が^が徒^{ただ}然^{ぜん}草^{そう}よ^よも^も人^{にん}と^と生^{せい}ま^まし^し印^{いん}
 入^まる^るい^いか^かも^もあ^あて^て世^よを^を道^{だう}ま^まん^ん事^じと^とい^いふ^ふま^まや^やし^しけ^けき^きひ^ひと^と
 よ^よむ^むさ^さが^がる^る事^じと^とい^いふ^ふと^とめ^めく^くが^がた^たい^いふ^ふあ^あも^もむ^むら^らぶ^ぶら^らん^んの^のよ^よら

づ^づの^の畜^{ちよく}類^{るい}入^まる^る事^じあ^ある^るま^まし^しく^くや^やと^とい^いふ^ふ今^{こん}日^{にち}の^の飯^{はん}を^をた
 べ^べる^る位^ゐの^の事^じ入^まる^る大^{だい}描^{びやく}でも^もす^する^る況^{けい}や^や人^{にん}間^{かん}入^まる^る今^{こん}日^{にち}の^の飯^{はん}を^をた^たべ^べる^る位^ゐの^の
 事^じ入^まる^る善^{ぜん}ふ^ふり^り人^{にん}間^{かん}入^まる^るま^まし^しあ^あら^らす^す後^{のち}の^の用^{よう}意^いす^する^るあ^あら^らす^す
 万^{まん}物^{ぶつ}の^の靈^{りやう}と^とい^いふ^ふ人^{にん}間^{かん}入^まる^る後^{のち}の^の用^{よう}意^いす^する^るあ^あら^らす^す三^{さん}度^だの^の飯^{はん}も^も急^{きよく}
 度^だた^たべ^べる^る畜^{ちよく}類^{るい}よ^よ大^{だい}描^{びやく}の^の事^じ入^まる^る今^{こん}日^{にち}の^の飯^{はん}を^をた^たべ^べる^る後^{のち}の^の用^{よう}意^い
 入^まる^る一^{いつ}日^{にち}の^の飯^{はん}も^も四^し日^{にち}の^の飯^{はん}も^も入^まる^る居^いる^る事^じ入^まる^る人^{にん}間^{かん}入^まる^る後^{のち}の^の用^{よう}
 意^いす^する^るあ^あら^らす^す大^{だい}描^{びやく}の^の事^じ入^まる^るサ^サ朝^{あさ}飯^{はん}サ^サ昼^{ひる}飯^{はん}と^と其^{その}時^{とき}く^くあ^あら^らす^す
 度^だた^たべ^べる^る是^{この}後^{のち}の^の用^{よう}意^いす^する^るあ^あら^らす^す也^也後^{のち}の^の事^じも^も又^{また}か^かく^くの^のご^ごと^とし^し
 今^{こん}生^{せい}入^まる^る後^{のち}の^の用^{よう}意^いす^する^るあ^あら^らす^す後^{のち}の^の福^{ふく}徳^{とく}を^を得^える^る極^{きよく}
 樂^{らく}入^まる^る事^じ又^{また}入^まる^る尊^{そん}貴^きの^の家^け入^まる^る事^じ又^{また}折^{せつ}角^{かく}入^まる^る人^{にん}間^{かん}と^と生^{せい}ま^まし^しと^と

牛馬の死るやうに死んでのあらぬ。何でも後生を預ひた
念仏を唱へて死後にあらぬ世仕ふふと思ふ者の別段に
骨を折れぬ世か出来か。極楽に往生仕やうと思ふ者
に別段に念ふかけてやうと祈らぬ。爾々志の中かやうと
祈るや。ス目入ふきとあるべし。哥ふ

男の事。ふす事業の罪科の中か。一とけりや。す念佛
忙が志の中か。罪科を犯す中か。やうと祈らぬと
あるべし。百年生ても二百年生ても。今日入降ふか。念仏
す日おやと。一日もふい。毎年毎歳忙が志の去来
忙が。今年も忙が。来年も忙が。志の忙が。けふも

忙が。何すも忙が。志の。毎年一とけりや。す念佛の内
みの苦も。うす。いのけり。ふも南無阿彌陀佛。いの声か
出ぬけ。やうす。世の苦も死んで死んで。未来の地獄。落
く。鋼然極火の苦も。をせ。祈る。あらぬ。百子万劫。ふも。うらむ
世更ふ。ふ。と。いの身の上。夫で。大難。あま。何卒
忙が。志の中か。念仏を唱へ。極楽往生。致す
べし。度。往。仕。損。ふ。と。祈。ふ。あ。時。入。ふ。と。あ。べ
し。万劫。ふも。受。か。さ。人。身。を。う。け。億劫。ふも。達。か。さ。法
ふ。値。中。ふも。他。力。本。願。の。念。仏。ふ。達。奉。る。事。入。一。世。や。二。世。の
功德。ふも。あ。ら。す。久。誦。善。根。を。つ。ま。た。る。ふ。よ。け。り。夫。を

ましふし。是を法所具の徳とす。善人悪人ふらるるまじぬ唯
 中ス者を極樂つとす。行所の法をとふへく居る。小判ふら
 六十目の徳が備けく居る。友も持人の善悪ふらかまらぬ。
 誰が持ても。六貫八百の働き。一文もふとりましふし。貴賤上
 下よかまらぬ。唯持て居る人の自由とあるあり。念仏も又
 かくのごとく。善人悪人ふらかまらぬ。唯中ス人を極樂へ連
 行所の法を備けく居る。是も依て中スるどの人皆極樂へ
 往生する也。是を法所具の徳とす。たとへば酒をのんだら
 善人悪人子供成人の差別あり。皆酔ふ酒のよとせる所
 の法をとふへく居る。巴豆ふら下る所の法をとふへく居る。

のんぶら善人悪人貴賤男女子供成人の差別あり。下
 る。巴豆ふら下る所の法を備へく居る。是を法所具とす。又
 又念仏もかくのごとく。唯中ス者が皆極樂へ往生する所
 の法が具けく居る。念佛ふら酒の極樂往生也。酒を
 吞入酔ふら酒。巴豆をのらば浮るがら酒。唐からしとらへ
 る。辛ひがら酒。念仏中せば極樂往生がら酒也。善人
 悪人子供成人の差別あり。唯南無阿彌陀佛と中ス者ハ
 皆極樂往生する也。誠ふらりがごき念仏とあるべし。悪人九
 夫の身も取ら。他力本願の念佛やど。ありがごき。りの
 ふきとあるべし。佛法中最第一の功德あり。

花嚴經けげんの如く我佛法三昧海中わがぶつはさんまいちゆうに於て唯一行をいっぎやう知る所謂念佛三昧也すゐんさんまいと念仏のありがたき事とよくあるべし成等正覺じやうじやうじやうかく者て真最初の花嚴經まさいしよけげんに念仏の一行除くとぎすも勝すぐきたる事と説とぎむる文殊もんじゆ菩薩ぼさつの諸しよの修行しゆぎやう門の中かみに念仏ねんぶつによるよるたる法門ほうもんあり彌陀の本願みやどのほんがん不可思議ふかしくぎふ者て定極樂じやうごくらくに往生おんじやうすと法照禪師ほふしやうぜんじの教おしへる涅槃ねはん經きやうの如く五百塵點劫ごひやくちんてんけつの修行しゆぎやうの西方さいほうの往生おんじやうもつり八万四千の法門はつばんしよせんに阿彌陀の三字あみだのさんじに撰せんすとけむの釋尊しやくそん五百塵點劫ごひやくちんてんけつの修行しゆぎやうの功德くふどくに念仏ねんぶつを申しと西方さいほうの往生おんじやうを預よふ人もずりて仏ぶつとありまぬ八万四千の經文はつばんしよせんの功德くふどくに阿

彌陀の三字あみだのさんじに撰せんめると是を唱なふる者ものは大善大功德だいぜんだいこうどくを得える安やすく極樂ごくらくに往生おんじやうすとけむの事こと也初め花嚴經けげんの終はつり涅槃經ねはんきやうに至いたる阿彌陀の念仏あみだのねんぶつのありがたき事ことと説とぎむる是を澄圓じやうげん菩薩ぼさつの十勝論じゆしやうろん八はつにひましく無勝淨土むしやうじやうど淨瑠璃じゆるり世尊せそん等とうの更さらに勸誘くわんすいの言無然ごんむぜんるよ西方淨土さいほうじやうどの二代にだい四十九年しゆじゆくじゆ三百六十余會さんびやくろくじゆかいの説法せっぽうに皆阿彌陀の行願ぎやうがんを説とぎぶる事ことあり所以ゆゑに妙樂大師めうらくだいしの諸經しよきやう所説しよせつ多おほく在ある阿彌陀と判はんずるありがたき無勝淨土むしやうじやうどといふの釋尊しやくそんの淨土じやうど也淨瑠璃じゆるり世尊せそんといふの藥師やくしの淨土じやうど也我淨土わがじやうど一いっ來きたと大藥師だいやくしの淨土じやうどといふの仰おほせらるる唯念佛ただねんぶつを唱なへり彌陀の淨土あみだのじやうどといふ

けつくと初めあり。四十九年三百六十余卷の説法入。弥陀
 の本願を説いて念仏を勧めよ。さうする事あり。法花經
 の修行者妙樂大師も諸經の中に入りて彌陀佛の事
 がやめよ。あるといふ事也。亦く彌陀の本願念仏の上
 をこそす物のふいふと。余行余善。目をかかけず。念仏の
 方へ修行せよ。弘法大師十無益詠の第一
 一 向ふ南無阿彌陀佛の上あり。諸善万行無益也。けり
 二 公かく頼む。ばもく彌陀をふと。公こそ無益也。けり
 三 八まんの寶藏をある。智慧ありと。彌陀頼ます。無益也。けり
 四 十悪も五逆も滅す。あると。公外の。修行む。さありけり

かやふあ哥十首あり。皆念仏のありが。とき事を作め
 ありあり又弘法大師八十八ヶ所極樂寺の歌
 一 西方の弥陀の浄土へ。移んあり。南無あり。公を口くせ。みせよ
 二 弘法大師の御哥も。念仏の大善大功德をある。無能上人の御哥も
 三 御ごも罪のやろぶる。御名あるを。はし。く唱ふる人の身の上
 四 御ごも罪のやろぶる。いんや唱ふる人の猶罪障消滅。あ
 五 て極樂に往生すといふ事也
 六 元祖大師の御傳ふ。菘摘水汲草かりのたぐひ。内外た
 七 みかけて。一文不通ある者も。唯南無阿彌陀佛。くと。ヤスむ

のらんかごふり。亦る所ふ。善知識有く。南無阿彌陀佛を
 十声唱へ志む。十声唱へると無量永劫の罪きつて。猛火の清涼
 の風とふり。天花降く。化佛がさけの来迎し。願り速ふ
 極樂入往生すと説くあり。以上もあきなり。ごとき事也
 観經の下三品のか。もうか。又段余經ふ。又法花經採ふ
 文をよく見るべし。猶ふ。皆凡夫の成仏の出来がごとき文をかりあり。是も依
 禁斷日蓮義す。いらく法花經ふ。無戒造罪の者の成
 佛する文あり。諸々の大系の行者。何れも弥陀の悲願を預
 稱名念佛志て出離すべし。正若く觀經ふ。十惡五逆無戒造
 罪の者も極樂入往生すとあり。又。阿彌陀佛が左也。此兩義を真

實入取捨せよ。苟も自己の宗義を執志く。妄りみ佛法
 の大道をけがす事。ふかきことあり。け文を能く工夫して念仏
 門ふ入る。成佛すべし。外ふ悪人の助る道ふ。何れもあき
 惠心僧都の極重悪人。無他方便。唯稱弥陀得生極樂の文みて
 よくさるべし。極重悪人の外ふ助る道あり。唯弥陀の本
 願念佛の二法あり。といふ事也。け心を哥ふ
 ○極めたる罪人。あきむ唯頼む。あきむの外。みたよりあきむ
 ○西へ行道より外ふ。今の世入る。き世を出る。門やあかろん
 曼等の歌の心を表けり。念佛の二法を修し。あきむし
 今迄の本も念佛をかり。切むる事ハ。末世の悪人の念仏

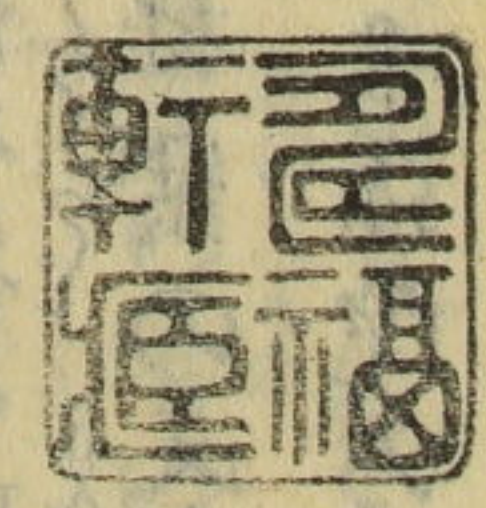
より外おもふ助る道ちゆうふさが友也。智者の善人ちゆうへ何家なんふくも
成佛ぶつするけふた愚者ぐしやの悪人あくへ外おもふ成佛ぶつの道ちゆうふくとも
べし惠心の極重悪人の文を能く考ふべし

南無阿彌陀佛

天保十一子八月吉祥日

東都下谷金杉

壽福軒述



日用心法鈔初編 三冊 主従心得草初編二編

同 二編 三冊 三編四編五編と

同 三編 三冊 八部十九冊皆出板

